

## 図版解説

## ウィーン美術史美術館所蔵画帖

塩谷 純

## はじめに

ウィーン美術史美術館 (Kunsthistorisches Museum, Wien) は、ハプスブルグ王家のコレクションを母体としたヨーロッパ屈指の美術館である。とくにピーテル・ブリューゲルやデイエゴ・ベラスケスといったルネサンス、及びバロック名画の数々は世界的によく知られるところだが、その膨大な蔵品のなかに日本の絵師による画帖が含まれていることは、西洋美術の殿堂として名だたる美術館だけに、これまで見過ごされてきたようである。

現在同美術館の彫刻・工芸部門 (Kunstskammer) の管理下にあるこの画帖は、同部門の基礎を形成したアンブラス・コレクション (Ambraser Sammlung)<sup>①</sup> の取得簿に記載されており、一八七三年の項目中、日本の帝からの贈呈品のひとつとして挙がっている。また画帖とともに伝えられたプレートには、日本の帝からオーストリア帝国皇帝フランツ・ヨーゼフ一世 (在位一八四八〜一九一六年) へ贈られた品である旨がドイツ語で記され (挿図1)、プレートの制作時期は不明ながら、日墮皇室にまつわる品として伝えられたことがわかる。

全二冊、一〇〇図からなる画帖は幕末から明治前期にかけて活躍した六名の絵師、

挿図1 画帖に付属して伝えられるプレート

即ち狩野永恵、住吉広賢、服部雪斎、松本楓湖、歌川広重 (三代)、豊原国周の手によるものである。日本の風俗や歴史、花鳥を極彩色で描き出した各画面は保存状態も良好で、かつ絵師の力量を存分に発揮した出来であり、これまで等閑視されがちだった彼らの画業、ひいては明治初期の絵画史を再考する契機となろう。またなによりも、それほどの画帖が遠い異国の地に伝来したことは大いに我々の興味をひくところである。したがって本稿では、まず画帖各画面の図様を総覧し、つぎにその制作をめぐる状況について考察を試みることにしたい。

## 画帖の全容

すでに記したように画帖は二冊からなり、それぞれ被蓋造の木箱に納められる。一冊の寸法は縦四二・三 cm×横三六・二 cm×厚さ一二・六 cmと、ちょうど一抱えするほどの大きさで画帖としては特大級といえよう。表紙には各々「畫鑑」と墨書きされた題箋が貼られているが、その題箋が金属製であるのも画帖が並々ならぬ事情で制作されたことをうかがわせている (挿図2)。

各冊は絹本彩色、縦三六・二 cm×横三〇・〇 cmの画面五〇図からなり、それぞれ

挿図2 画帖表紙

三名の絵師がほぼ均等な量を分担している。画帖自体は巻数の表示を欠くが、美術館では狩野永恵、住吉広賢、服部雪斎の担当する画帖を第一巻、松本楓湖、歌川広重、豊原国周の担当する画帖を第二巻としている。本稿でも便宜上これに従って各画面に番号を付し、略述することにした（例えば第二巻の第三面なら2―3）。三一―四七頁に掲げたのが画帖全画面の図版である。以下、各絵師ごとにその略歴とあわせ、画面を見ていくことにしよう。

\* 1―15 狩野永恵

狩野永恵立信（一八一四―九一年）は、江戸幕府の奥絵師をつとめた人物。木挽町狩野家八代伊川院栄信の六男として生まれたが、中橋狩野家の養子となり江戸城本丸の障壁画制作等、幕府の御用に当たった。そうした任務のひとつとして諸外国贈呈用に描いた屏風が近年海外で発見され、御用絵師としての力量が作品を通して明らかになってきている。維新後も明治宮殿障壁画の揮毫にたずさわり、明治二三（一八九〇）年帝室技芸員制度の設置と同時に帝室技芸員となるなど御用絵師的な役割を果たすが、明治一一（一八七八）年に来日したアーネスト・F・フェノロサに古画研究と鑑定法を教授し、狩野永探理信の名を与えたことでも知られている。

永恵が担当した画面は一五図。落款に用いられた「藤原」姓は狩野家の本姓である。モチーフは子の日の遊び（1―1、3）や虫狩（1―9）といった宮中風俗を中心とするが、雨宿り（1―8）や双六（1―15）をする庶民の絵姿も盛り込まれている。しかしそれらは第二巻の松本楓湖や豊原国周による当世風俗を活写したものとは異なり、百年以上も前の英一蝶や《彦根屏風》（挿図3）の先例をほぼ引き写した図様で、総じて過去の時代風俗を描き出すのが永恵の役目だったようである。他にも《扇面法華経》（1―11）等、古画からのあからさまな引用は、狩野派における粉本依存を回想した橋本雅邦の文章（「木挽町画所」『国華』三号所載）を想起させる。

\* 1―16―30 住吉広賢

住吉広賢（一八三五―八三年）はやまと絵の奥絵師として、狩野派と並び江戸幕

府の御用をつとめた住吉派の第八代目にあたる。狩野永恵と同様、フェノロサの日本美術研究に協力し、明治一三年にはフェノロサの関西旅行に同行、求めに応じ模写を行っている。

広賢が描いた一五図には、足柄山の新羅三郎義光（1―20）や那須与一（1―23）、業平東下り（1―24）等、故事や物語に取材したものが目立つが、金泥を引いた霞でまともあげる画面構成は狩野永恵のそれと共通する。また《年中行事絵巻》や《七十一番職人歌合絵巻》、《彦根屏風》（挿図3）からの引用（1―25、28、29、30）も見受けられる。

\* 1―31―50 服部雪斎

服部雪斎（一八〇七―？年）<sup>(2)</sup>は谷文晁に師事した遠坂文雍の門人で、幕末から

明治前期にかけて『目八譜』『半魚譜』『華鳥譜』等の博物図譜を描いたことで知られる。明治六（一八七三）年には文部省博物館に「動物之写真図描写総じて画図之事取扱」（博物館職員名簿）として出仕している。博覧会にも度々動植物の画を出品、明治一〇年の第一回内国勸業博覧会では褒状を受賞しているが、現在では博物図譜以外の作例がほとんど知られておらず、本画帖の出現は雪斎研究に大きく寄与するものと思われる。

雪斎は、画帖を担当した六名のなかで最も多い二〇図を手がけている。最後の1—50に記された「己巳初冬六十三翁雪斎文修画」の落款より雪斎が明治二（一八六九）年にこの画帖を描いたことが判るが、年記についてはあらためて触れることにしたい。博物図譜の名手らしく、いずれも花鳥草虫を克明に描き出しており（挿図4）、たとえば1—42の、蝸牛がしゃがの葉をはった跡の滑りを雲母で表現しているところ（挿図5）などは目を見張る思いがする。それほどまで細やかな描写は、色彩豊かなモティーフとあいまって実に画帖中の白眉といえよう。

挿図4 1—40 部分

挿図5 1—42 部分

# \* 2—1—16 松本楓湖

松本楓湖（一八四〇—一九二三年）<sup>③</sup>は沖一蛾、佐竹永海に画を学んだ後、歴史人物画に新生面を拓いた菊池容斎の弟子となる。謹厳実直な性格もあって師風をよく守り、大正期に至るまで容斎派の大家として画壇に名を馳せた。また彼の主宰する安雅堂画塾からは今村紫紅、速水御舟、小茂田青樹といった近代日本画の逸材を輩出し、教育者として果たした役割も大きい。

楓湖が描いたのは一六図。2—16にみられる「己巳初冬／楓湖」の款記からは、服部雪斎の画と同様、明治二（一八六九）年に描かれたことが判る。現在知られている楓湖作品のなかではかなり早い時期のものといえよう。すでに菊池容斎に弟子入りした後の作らしく、表情豊かにさまざまなポーズをとる人々の描写は、人体デッサンに基づきながら五百人以上もの歴史人物の姿態を描きわけた容斎の『前賢故実』を彷彿とさせるし、2—9は同じく王子田楽をあらわした容斎の図様（挿図6）と合致する。しかし本画帖にみられる四季折々の庶民風俗という題材は、その後歴史画で一家を成す楓湖としては稀有のものであり、また2—1、4をはじめとする濃彩の画面も、とかく淡白な印象の強い楓湖画にあって文字通り異色の作例といえるだろう。

挿図6 菊池容斎《王子田楽》  
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵

\* 2―17―33 歌川広重（三代）

歌川広重（三代 一八四二―九四年）<sup>(4)</sup>は明治初期に文明開化の様子を描いた、いわゆる開化絵で一世を風靡した浮世絵師。《東海道五拾三次》等の名所絵で名高い初代広重に入門、初代没後は二代広重につき修行するが、二代が初代の養女と不仲で師家を去った後は入婿して広重の名跡を継ぎ、自らは二代と称した。幕末には洋風化の進む横浜の街並みを描いた横浜浮世絵を手がけ、維新後も西洋建築の立ち並ぶ東京の風景を錦絵にあらわす。その量と質は他の絵師をはるかに圧倒、開化絵の第一人者とされている。

広重が描いた一六図は、いずれも東京近郊の風景である。点景人物は鬚を結い刀を差し、未だ文明開化の眺めとはいえ、東京の景というよりもむしろ江戸名所の図とみるほうが相応しいだろう。じじつ日比谷（2―18）、八景坂（2―30）、目黒元不二（2―32）などは初代広重の《名所江戸百景》（挿図7）を明らかに踏襲しており、全体的に三代目ならではの世相に敏感でジャーナリスティックな感覚は控えられている。

\* 2―34―50 豊原国周

豊原国周（一八三五―一九〇〇年）<sup>(5)</sup>は、はじめ豊原周信に師事し羽子板押絵の原画を描くが、嘉永元（一八四八）年頃、役者絵を得意とする歌川豊国（三代）の門人となる。師と同様役者絵をよくし、とくに大判三枚続の画面に描く大首絵は広く人気を博した。私生活では酒好きではなはだ奇行にとみ、妻を替えること四〇人以上、転居も八三回におよんだという。

国周は一七図を担当。当世庶民風俗という点では松本楓湖と共通した題材だが、国周の場合、農作業（2―36、37）や大工仕事（2―38）等、より日常的な営みを扱っているようである。後述するように国周は一八六七年パリ万国博覧会出品のための画帖制作にもたずさわっており、その際担当したのは芸者や町家の女房といった美人画であった。本画帖についても各画面に必ず女性が描かれ、日常生活がモチーフとはいえ浮世絵らしい華やかさが具わっている。



以上、絵師ごとに画帖の図様を通覧してみた。いずれも各絵師の画業を考える上で新たな光を当てるものといつてよいだろう。ただ、そうした個別的な観点にくわえ、画帖を総体で眺めたとき、旧幕府の奥各人から市井の浮世絵師までもが参画し、画題もほぼ絵師の得意とするジャンルに添って人物・花鳥・風景と多岐にわたる点は注目に値する。次章ではそうした画帖のもつ性格、そして美術館に伝わる由来をふまえ、その制作の経緯について考察することにした。

### 制作の経緯

前章でもみたように、画帖自体に残された文字情報として服部雪斎と松本楓湖の画中（1—50、2—16）にある年記、即ち「己巳初冬六十三翁／雪斎文修画」（挿図8）と「己巳初冬／楓湖」（挿図9）より、この画帖は明治二（一八六九）年の初冬前後に制作されたものと考えられる。また美術館に伝わるアンブラス・コレクション取得簿には、一八七三年の項に日本の帝から皇帝への贈呈品として次の六件が挙げられている。

風景及び人物の装飾で構成された大きなブロンズの置物

繊細な日本の漆絵と銀製の金具付き飾り棚 一對

金模様の日本の絹布 五巻

日本の文字の記された和紙 五枚 うち二枚に魚の皮の漉き込み

動植物の写生画及び日本人の生活を描写した数多くの画像からなる扇状に折りたたまれた大型画帖 二冊

アメリカインディアンの平和の煙管（彫刻を施した管） 一本<sup>(6)</sup>

このうち美術史美術館に伝えられたのは五番目の画帖二冊のみである。アンブラス・コレクションに入った一八七三年、即ち明治六年といえは、ウィーン万国博覧会が開催された年であることが想起されよう。ウィーン万博は明治政府が初めて公式に参加した博覧会として知られるが、その目録には本画帖に該当するものは見当たらない。

挿図8 1—50 服部雪斎年記

挿図9 2—16 松本楓湖年記

明治政府がオーストリア公使より万博への参加要請を受けたのが明治四年二月、博覧会事務局が設置されたのが翌五年一月である（田中芳男・平山成信編『澳国博覧会参同記要』明治三〇年八月）ことを考慮しても、画帖に記された明治二年の年記はそれを溯るものであり、本画帖がウィーン万博をにらんで制作されたとは考えにくい。

いっぽう画帖自体に刻まれた明治二年という時期に焦点を当ててみると、同年九月のこととして日澳洪修好通商航海条約の締結という一事が浮かび上がってくる。これはオーストリア・ハンガリー帝国が東アジア進出の礎として明治政府と結んだもので、アントーン・フォン・ベッツを公使とするオーストリア使節団が明治二年九月二日に東京に到着、一二日に皇居で天皇に謁見、一四日に条約の調印を行った。その経緯については、すでにペーター・パンツァー氏が『日本オーストリア関係史』

(竹内精一・芹沢ユリア訳 創造社 昭和五九年一二月)<sup>(8)</sup>のなかでオーストリアと日本の諸文献を渉獵の上詳述しており、同書によれば天皇への謁見が行われた九月一二日には使節団より献上の品が届けられたという。さらに国立公文書館が所蔵する太政官公文録には、次のような文書が記録されている。

今般澳地利公使参 朝同国政府ヨリ献上物品々奉差上右ハ何レモ御返謝物不被差遣候テハ不相成候ニ付左ノ品々取調差送候様可仕ト存候

漆器類

二ツ凡金千両位迄

古銅器類

二ツ凡金千五百両位迄

太刀

一振凡金五百両位

右澳地利帝へ

漆器類

二ツ凡金千両位

大和錦

三卷凡金五百両位

日本産草木類  
大和風俗人物類

画卷物 二卷一卷凡金二百両位

右皇后へ

太刀

一振凡金二百両位

陶器

四品総計

純子  
縮緬 ノ内

凡金千五百両位

右使節並隨從官員ノ等級ニヨリ差別致シ被下候積右金高総テ凡七千両ヲ目当ニ致候積ニ御坐候段申上置候此尤御金出ノ儀大蔵省へ御沙汰可被下候以上

已九月

外務省

弁官御中

尚以献上品並当省其外へ贈物品書為御見合相廻シ候右品物数種ノ内不目馴器械モ有之価金高分リ兼候ヘトモ総計ニテハ余程ノ金高ニ可有之候間被遣候品物一万両ヲ以凡積リ致シ度候ヘトモ御入費不相嵩様ニト存七千両ヲ目当ニ取調候儀ニ有之候可為伺之通

オーストリア使節団より献上された品々に対し、その返礼について外務省より弁官へ伺いを立てている文書だが、同公文録収録の目録、およびパンツァー氏の研究<sup>(9)</sup>によれば、使節団が天皇・皇后へ献上した品は次のようなものであったらしい。

天皇への献上品↳オーストリア皇帝大理石像・オーストリア皇帝写真・風景写真

アルバム一箱・オーストリア遊獵画本一箱・ハンガリー製鞍二

具・ボヘミアガラス花瓶二箇・オーストリア皇帝紋章附眼鏡一

箇・オーストリア金銀貨幣数品一箱

皇后への献上品↳オーストリア琴(グランドピアノ)一面・写真眼鏡画三十六葉

入一箱・ハンガリー風景写真一箱・オーストリア名産砂糖菓子

数品一箱

その他にも書籍や地図、さらには測量器械や電信機といった「不目馴器械」も使節団は日本政府へ贈呈している。右の文書ではそれらの贈物に見合うべく本来は総額一万両相当の返礼をしたいところだが、それではあまりに高いので七千両で抑えるべく伺いを立てているのが何ともほほえましい。

返礼は最終的にどのような品に落ち着いたのだろうか。『日本外交文書』第二卷第三冊には使節団へ贈呈された目録が収録されているので、その冒頭を引用しよう。

已九月澳地利皇帝へ御進贈並公使其外へ被下候品目録

澳地利

皇帝陛下へ

一 太刀

一 振

一 古銅香爐

一個

一 蒔絵書棚

一個

以上

澳地利

皇后陛下へ

一 蒔絵書棚 一個

一 画帖 二箱

一 大和錦 五卷

以上

目録にはこの後、オーストリア外相・副外相、ペッツ公使以下使節団の面々への贈呈品が列挙されているが、ここではそれは省略し、ウィーンに現存する画帖の由来を検討することにした。

太政官公文録、及び『日本外交文書』より文書を引いたのは、もとよりその中の「日本産草木類／大和風俗人物類 画卷物 二巻」と「画帖 二箱」こそが、問題の画帖ではないかと目するからである。揮毫を命じられた絵師の名は記されていないものの、画題はたしかに「日本産草木類／大和風俗人物類」であり、当初は画卷の予定であったが最終的に目録化されたのは「画帖 二箱」で、形式も合致する。画帖がオーストリア皇帝でなく皇后への贈呈品である点は、皇帝への贈呈品とする画帖付属のプレート、及びアンブラス・コレクション取得簿の記述と若干異なるが、取得簿の記述を皇后への贈呈品も含めたものだとすると、六件のうち四件は『日本外交文書』の目録にそれらしき品が見出せる。即ち、

風景及び人物の装飾で構成された大きなブロンズの置物↓古銅香爐 一個

繊細な日本の漆絵と銀製の金具付き飾り棚 一對↓（皇帝と皇后への贈呈品を一对と仮定して）蒔絵書棚

金模様の日本の絹布 五巻↓大和錦 五巻

動植物の写生画及び日本人の生活を描写した数多くの画像からなる扇状に折りたたまれた大型画帖 二冊↓画帖 二箱

という具合である。もっとも残りの二件、

日本の文字の記された和紙 五枚 うち二枚に魚の皮の漉き込み

アメリカインディアンの平和の煙管（彫刻を施した管） 一本

については『日本外交文書』目録で余った太刀一振に対応しようもなく、問題が残ることは留意しておかねばならないだろう。

それから現存の画帖にある服部雪斎の「己巳初冬六十三翁／雪斎文修画」と松本楓湖の「己巳初冬／楓湖」という落款から、その制作が明治二年の初冬、つまり陰暦の一〇月までかかったことが判るが、これについても文書との整合性を検討する必要がある。まず太政官公文録の文面からは、使節団からの贈呈を受けた上で返礼の品を検討していることがうかがえる。使節団より数々の贈呈品が献上されたのは九月一二日だから、返礼の検討に入ったのはそれ以降ということになるだろう。そして使節団が帰国の途に付いたのは一〇月一日であり、『日本外交文書』によればその二日前の一〇月九日に目録とともに贈呈品を渡し、翌一〇日付（陽暦十一月一三日付）のペッツ公使による受領書も収録されている。したがって文書上、画帖が制作されたのは明治二年の九月一二日から一〇月九日までの間と考えられ、現存する画帖の年記ともほぼ矛盾しないことになる。ただし問題点としては、一〇〇図に及ぶ大画帖をわずか一月足らずという短期間で発注から完成までこぎつけることがはたして可能であったか、明治六年にアンブラス・コレクションに入るまでのタイムラグをどう説明するか、といったことが挙げられるだろう。因みに、贈呈品がウィーンに到着した日時は詳らかにしないが、その感謝状がオーストリア皇帝から明治天皇宛に出されたのは、使節団来日よりおよそ一年半を経た明治四年三月一日（陽暦五月八日）のことである。<sup>10)</sup>

いったいに政府が他国へ献上品として絵画を贈るといえるのは、こと日本において珍しいことではなかった。榊原悟氏が著書『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』（ぺりかん社 平成一四年七月）で解き明かしているように、一五世紀初頭より明や李氏朝鮮といった異国の王へ日本の絵画を贈ることは本格的に行われ、江戸時代にも朝鮮国王へ通信使を介して贈る絵画の制作は御用絵師の重要な仕事として位置づけられていた。そして幕末には、欧米列強の国王や大統領への贈物としても描かれるようになる。前述の狩野永恵も安政三（一八五六）年にオランダ国王ウィ

レム三世、同六年にアメリカ大統領ブキャナン、及びイギリスのヴィクトリア女王に贈る屏風や掛軸の制作に従事、うちオランダへ贈られた屏風一双は他の御用絵師の作とともに、現在もライデン国立民族学博物館に伝えられている。もっとも献上品として描かれたのは、榊原氏の著書のタイトルにもあるようにその殆どが屏風であった。画題も注釈抜きに観賞できる花鳥画が多く、儒官の林述斎（一七六八―一八四一年）が指示したように、異国に贈る故「皇国ふりの花やかというなるさま」（住吉広行『御屏風之記』）を装うには屏風という大画面は最適であったといえよう。

画帖が海外向けに調進された例としては、一八六七年に開催されたパリ万国博覧会への出品画がある。同博覧会は徳川幕府と薩摩藩、佐賀藩が各々独自の出品を行なったことで知られるが、幕府の命で制作された絵画は屏風、掛軸、額絵（油彩画）と画帖の四種。屏風は狩野勝川院雅信による吉野・龍田図、掛軸は源氏物語図三幅対と那須与一扇的図で、源氏物語図はウィーンの画帖を手がけた絵師のひとり、住吉広賢が担当したものと考えられる<sup>(1)</sup>。また額絵については、西洋画の研究機関であった開成所画学局の在籍者が油彩画一〇点を制作、草創期の日本油画が万博内美術展示室の壁面を飾ったことは、当時の展示風景を撮影した写真からも確認されている<sup>(2)</sup>。

そして画帖だが、万博出品にあたり「花画帖」と「浮世絵画帖」なる二種類のものが用意されたという。「花画帖」は幕府の御用絵師五〇名による一帖と江戸城下の絵師五〇名による一帖、各名一図担当で計一〇〇図からなり、人選をはじめその制作については狩野勝川院雅信が統括した。いっぽう「浮世絵画帖」は当初美人図一帖、江戸祭礼図一帖、江戸名所図一帖、各五〇図の構想だったが、期日に間に合わせるべく、最終的には一帖減らして美人図一帖、江戸祭礼・名所図一帖、各五〇図で「花画帖」と同様計一〇〇図となった。人選には江戸町奉行があたり、五雲亭貞秀や歌川立祥（二代広重）ら歌川派の浮世絵師一名が制作にたずさわった。のちにウィーンの画帖も手がけることになる豊原国周もそのなかの一人で、このときは美人図一〇図を担当している<sup>(3)</sup>。

これらパリ万博出品作は、残念ながら現存を確認できるものは一点もない。しかしながら画帖に関していえば、別帖とはいえ狩野派や浮世絵師といった複数の画派

を参画させ、画題も人物や風俗、風景とバランスよく配するあたり、本稿で紹介したウィーン美術史美術館所蔵の画帖の先鞭をなすものといえよう。またすでに推察したように、ウィーンの画帖が明治二年に明治天皇よりオーストリア皇帝へ贈られた贈答品とするなら、パリへもたらされた画帖との間に浮かび上がるひとりの人物、すなわちアレクサンダー・フォン・シーボルトについて、ここでふれておくべきかもしれない。

アレクサンダー・フォン・シーボルト（一八四六―一九一一年）<sup>(4)</sup>は、医師として来日し長崎の鳴滝塾で診療と教育に力を注ぎ、ヨーロッパでは日本学のパイオニアとして著名なフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの長男である。ライデンで生まれ少年時代をボンで過ごしたアレクサンダーは、安政六（一八五九）年十二歳で父に連れられ、日本に渡る。そして驚くほどの速さでマレー語と日本語を身につけ、その語学力により江戸駐在のイギリス公使館の通訳官として雇われた。維新後は岩倉使節団の随行や条約改正会議の出席等、日本の外交顧問として日欧親善のために尽力することになるが、その彼が関わった初期の仕事が慶応三年に徳川幕府が派遣したヨーロッパ使節団、つまりパリ万博に参加する一行の通訳であり、また明治二年オーストリア使節団来日の折の通訳であった。とりわけ後者についてはその活躍ぶりはめざましく、その功績によりオーストリア皇帝から貴族の称号（男爵）と紋章を授与されている。

パリ、およびウィーンへもたらされた画帖の制作にアレクサンダーが積極的に関わったという記録があるわけではない。しかし明治維新という政権交代の直前と直後を通して外交に携われる人物はごく限られていたであろうし、オーストリア使節団来日の際には同国首相ボイストと個人的に知己であったこともあり、アレクサンダーの働きは単なる通訳以上のものであったようだ<sup>(5)</sup>。さらにその後のウィーン万国博覧会（明治六年）に際しては、アレクサンダーが日本の出品内容について建言を行ったことが『澳国博覧会参同記要』に記されており、明治二年の折もこれと似たような役回りを果たした可能性は十分に考えられるのである。

アレクサンダーの父フィリップが島出入絵師であった川原慶賀に日本の風俗や植物を描かせ、江戸にいた葛飾北斎にも制作を依頼するほど日本研究における絵画



跡見花蹊画



狩野永恵画



豊原国周画

挿図10 北京故宫博物院所蔵 画帖

歌川広重（三代）画

の重要性を認めていたことはよく知られている。ならばその息子アレクサンダーの建言によって絵画、しかも従来異国への贈答品の定番であった屏風ではなく、小画面だが数多の視覚情報を繰り出して見せる画帖こそが日本の風土をよく伝える格好の品として採択され、制作されたとしても不思議ではないだろう。ウィーンに伝えられた画帖の、たとえば博物図譜の画工であった服部雪斎の濃密な花鳥画、あるいは松本楓湖や豊原国周の、普段の画作とは異なる図説的な風俗描写のなかには、シーボルト父子のまなざし——それは異文化を眺めるばかりでなく知の対象として切り拓こうとする、勝れて近代的なまなざしであったといえよう——が潜んでいるかもしれないのである。

## おわりに

本稿ではウィーン美術史美術館に残された日本の画帖について、その紹介、および制作経緯の検討を行った。狩野永恵、住吉広賢、服部雪斎、松本楓湖、歌川広重(三代)、豊原国周という流派をこえた六名が手がけた一〇枚の画面には、日本の歴史、花鳥、風俗、名所等と多岐にわたるモチーフがくりひろげられている。画中にとどめられた明治二年という年記、また美術館に伝わる記録や日本側の文書をもふまえて、画帖が同年秋の日壤洪修好通商航海条約締結に際し明治天皇からオーストリア帝国皇帝フランツ・ヨーゼフ一世への贈呈品である可能性を推察した。

実は同工の画帖が中国にも存在するらしく、北京の故宮博物院編『故宮蔵日本文物展覧図録』(二〇〇二年四月)には狩野永恵、跡見花蹊、豊原国周、歌川広重の手による画帖が紹介されている(挿図10<sup>17</sup>)。掲載された三六点の図版からは、いずれの画も絹本に濃彩で描かれ、永恵が歴史風俗、花蹊が花卉、国周と広重が当世風俗を担当したことがわかる。跡見花蹊を除く三名の絵師はウィーンの画帖にもたずさわっており、日本の風土を図説するかのような構成もその共通性をうかがわせている。『日本外交文書』第四巻の「一五四 清国トノ條約本日調印ヲアセル旨等報告ノ件」によれば、明治四年七月の日清修好条規調印の折も、明治天皇より清国皇帝・皇太后・恭親王へ贈呈品が贈られたが、その目録中には計四冊の画帖が見出せる。また高橋勝介『跡見花蹊女史伝』(東京出版社 昭和七年)には、跡見花蹊が

明治四年に外務省より絹本画帖二五枚を依頼されたとあり、北京の画帖がそれらの文献にみえる画帖と同一のものであることは十分に考えられるだろう。

従来、幕藩体制に支えられた御用絵師は、たとえば狩野芳崖の境遇を引き合いにしながら、明治維新により禄を失い路頭に迷うイメージで語られてきた。佐藤道信氏の研究によって、奥絵師・表絵師クラスの狩野派の絵師たちは維新後も新政府の関係機関に出仕していたことが明らかになったが、具体的な制作事情については未だ杳として掴み得ない状況にある。本稿で紹介したウィーンの画帖、あるいは北京に伝わる画帖が文献中にみえる皇室間の贈答品であると断定するにはまだ検討の余地を残すものの、開国のスタンスの中で国際関係を築き上げるためには、体制が交代しても親善の画筆をとる「御用絵師」の存在は以前にもまして必要であった筈である。そうした意味もふくめて、異国の地に伝えられた画帖は、古美術と近代美術史のはざまにあるがゆえに研究の立ち後れが目立つ明治初年の絵画史の解明に、大きな位置を占めているように思われるのである。

## 註

- (1) アンブラス・コレクションは彫刻・工芸部門の核となる収集のひとつで、元来インスブルック郊外のアンブラス城で展示されていたためこの名がある。一九世紀にはその大半がウィーンに移された。同部門の沿革については『ウィーン美術史美術館』(みすず書房 平成三年一〇月)を参照。
- (2) 服部雪斎については、主に児島薫「文明開化の間に 幕末・明治の画家たち 博物図譜の画家 服部雪斎」(『三彩』五三三・五三四号 平成四年二・三月)を参照。同文は辻惟雄編著『幕末・明治の画家たち 文明開化のはざまに』(ベリカン社 平成四年二月)に収録。
- (3) 松本楓湖については、主に添田達嶺『半古と楓湖』(睦月社 昭和三〇年一月)、および東町立歴史民俗資料館『松本楓湖展』図録(平成一〇年四月)を参照。
- (4) 歌川広重(三代)については、主に横田洋一「三代広重と文明開化の錦絵」『神奈川県立博物館研究報告』一三三・一九号 昭和六二年三月・平成五年三月)を参照。

- (5) 豊原国周については、主に野田市郷土資料館『最後の浮世絵師 豊原国周展』(平成五年一〇月)・おぢAmy Reigle Newland *Time present and time past. Images of a forgotten master. Toyohara Kunichika 1835-1900* (Leiden:Hotel Publishing 1999) を参照。
- (6) 原文は左記の通り。  
 Grosser, aus mehreren Theilen bestehender Bronze-Aufsatz mit landschaftlicher und figuralischer Ornamentierung: Japanisch.  
 Zwei Etagères mit feinen japanischen Lackgemälden und Silberbeschlägen.  
 Fünf Rollen in Gold gemusterte japanische Seidenstoffe.  
 5 Bogen Bastpapier mit japanischen Schriftzeichen, dabei 2 in Bastpapier eingeschlagene Fischbälge.  
 2 grosse, fächerartig gestaltete Albums mit Abbildungen von Pflanzen, Thieren und mit vielen figuralischen Darstellungen aus dem Leben der Japanesen.  
 Eine indische Friedenspfeife (bloss das geschnitzte Rohr).  
 (7) 本稿中、太陽暦採用(明治五年一二月)以前の月日は基本的に旧暦で統一した。  
 (8) 原書はPeter Pantzer *Japan und Österreich-Ungarn* (Wien 1973)。  
 (9) パンツァー『日本オーストリア関係史』二七頁・二二二頁  
 (10) パンツァー『日本オーストリア関係史』一九八頁  
 (11) 榊原『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』三〇〇～三〇八頁  
 (12) バリ万博出品の油彩画については、森仁史「一八六七年バリ万国博覧会における『日本』 日本出品をめぐる」(『戸定論叢』三号 平成五年三月)を参照。  
 (13) バリ万博出品の画帖については、榊原『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』三〇八～三一七頁の他、菊池秀雄編『第二回バリ万国博出品浮世絵関係資料(一)～(三)』(『ミュージアム』八九～九一 昭和三三年八～一〇月)を参照。  
 なお東京大学史料編纂所所蔵の『仏国博覧会御用留』所収「品物目録 坤」[「出品元価帳」には「浮世絵画帖」に該当するものがなく、かわりに計一〇〇点の「浮世絵額」ないし「人物画額」「景色画額」が記載されており、「浮世絵画帖」は最終的に額絵に変更された可能性がある。東京国立文化財研究所編『明治期万国博覧会美術品出品目録』(中央公論美術出版 平成九年三月)一一～一二頁参照。
- (14) アレクサンダー・フォン・シーボルトについては、主にヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同編著『黄昏のトクガワ・ジャパン シーボルト父子の見た日本』 NHKブックス 平成一〇年一〇月)を参照。

- (15) パンツァー『日本オーストリア関係史』二二二頁
- (16) 『澳国博覧会参同記要』一六頁。以下はその引用。

「御雇独乙人「バロンアレキサンデル、ホン、シーボルト」氏ノ建言ニ由リ欧州ニ於テハ東洋風俗ノ奇観ナルヨリ我出品ニ注目スルハ必然ナレバ一二巨大ノ物ヲ出品スルハ可ナラントノ議ヲ決シ金鑪、鎌倉大仏紙ノ張抜、東京谷中天王寺五重塔ノ雛形、大太鼓、犬挑灯、囀園、神社ノ建築及売店ヲ出品シタリ」

- (17) 井手誠之輔氏の御教示による。

- (18) 佐藤道信「狩野派最後の光芒 維新後の狩野派と芳崖」(下関市立美術館『没後百年 狩野芳崖展』図録 昭和六四年一月)

## 謝辞

本稿は、平成一三年一二月五日に練馬区立美術館の野地耕一郎氏とウィーン美術史美術館で行なった調査に基づくものです。調査にあたっては、ウィーン美術史美術館彫刻・工芸部長ルドルフ・ディステルベルガー氏 Dr. Rudolf Distelberger の高配を賜り、在スイス日本国大使館のウェーバー・トシ子氏には仲介の労をとっていただきました。調査に際しては在オーストリア日本国大使館の神山武公使、滋賀正樹広報文化センター所長、およびウルソラ・シュタイナー氏 Ms. Ursula Steiner、西村恭史氏にご協力いただきました。

また本稿をまとめるにあたっては、調査に引き続きウェーバー・トシ子氏のひとかならぬご尽力にあずかり、また飯島満氏、大熊敏之氏、大塚英明氏、桑山童奈氏、児島薫氏、高桑いづみ氏、塚本陽子氏、野川美穂子氏、俵木悟氏、福永知代氏、トーマス・プソータ氏 Dr. Thomas Psota、古田亮氏、宮田繁幸氏、フランソワ・リンダー氏 Ms. Françoise Linder にご教示・ご協力いただきました。

右の方々に、末筆ながら厚くお礼申し上げます。

1 | 1 狩野永恵 子の日

1 | 3 狩野永恵 小松引き

1 | 5 狩野永恵 花見

1 | 2 狩野永恵 羽根突き

1 | 4 狩野永恵 白拍子

1 | 6 狩野永恵 江戸時代女性風俗



1 | 7  
狩野永恵 闘鶏

1 | 9  
狩野永恵 虫狩

1 | 11  
狩野永恵 紅葉狩

1 | 8  
狩野永恵 雨宿り

1 | 10  
狩野永恵 橋姫

1 | 12  
狩野永恵 鹿島踊

1 | 13  
狩野永恵  
碁盤人形

1 | 15  
狩野永恵  
双六

1 | 17  
住吉広賢  
還城楽

1 | 14  
狩野永恵  
流鏑馬

1 | 16  
住吉広賢  
三番叟

1 | 18  
住吉広賢  
十二単

1 | 19 住吉広賢 石山寺

1 | 21 住吉広賢 巴御前

1 | 23 住吉広賢 那須与一

1 | 20 住吉広賢 足柄山

1 | 22 住吉広賢 鉦引

1 | 24 住吉広賢 業平東下り

1 | 26  
住吉広賢  
賀茂競馬

1 | 28  
住吉広賢  
烏帽子折り

1 | 30  
住吉広賢  
三味線

1 | 25  
住吉広賢  
蹴鞠

1 | 27  
住吉広賢  
雪中鷹狩

1 | 29  
住吉広賢  
扇売り

1—31 服部雪斎 梅に小禽

1—33 服部雪斎 桜にかササギ

1—35 服部雪斎 連翹、桜にヒヨドリ

1—32 服部雪斎 梅にキビタキ

1—34 服部雪斎 梅にヤマガラ、蛙

1—36 服部雪斎 桜に鴨

1 | 38  
服部雪斎  
桜に小禽

1 | 40  
服部雪斎  
躑躅に蜻蛉

1 | 42  
服部雪斎  
しゃがに蜻蛉、蝸牛

1 | 37  
服部雪斎  
桜に鶯鳥

1 | 39  
服部雪斎  
牡丹に蝶

1 | 41  
服部雪斎  
菖蒲に蜻蛉、蛭

1 | 43 服部雪斎 百合に甲虫

1 | 45 服部雪斎 海棠に文鳥

1 | 47 服部雪斎 菊にヒタキ

1 | 44 服部雪斎 葡萄に井守

1 | 46 服部雪斎 杜若に燕

1 | 48 服部雪斎 芙蓉にシジユウカラ

1 | 49 服部雪斎 仏手柑に蟬、蜂

2 | 1 松本楓湖 万歳

2 | 3 松本楓湖 鳥追い

1 | 50 服部雪斎 水仙に蛙、蜘蛛

2 | 2 松本楓湖 太神楽

2 | 4 松本楓湖 猿回し



2 | 5 松本楓湖 梅見

2 | 7 松本楓湖 石橋

2 | 9 松本楓湖 王子田楽

2 | 6 松本楓湖 花見

2 | 8 松本楓湖 床涼み

2 | 10 松本楓湖 輕業

2 | 11  
松本楓湖  
踊り

2 | 13  
松本楓湖  
道場

2 | 15  
松本楓湖  
傀儡まわし

2 | 12  
松本楓湖  
角兵衛獅子

2 | 14  
松本楓湖  
相撲

2 | 16  
松本楓湖  
年の市

2 | 17 歌川広重 (三代) 霞ヶ関

2 | 19 歌川広重 (三代) 潮干狩り

2 | 21 歌川広重 (三代) 吉原

2 | 18 歌川広重 (三代) 日比谷

2 | 20 歌川広重 (三代) 三囲

2 | 22 歌川広重 (三代) 飛鳥山

2  
—  
24 歌川広重 (三代)  
芝袖明増上寺

2  
—  
26 歌川広重 (三代)  
両国

2  
—  
28 歌川広重 (三代)  
熊野滝

2  
—  
23 歌川広重 (三代)  
小金井堤

2  
—  
25 歌川広重 (三代)  
永代橋

2  
—  
27 歌川広重 (三代)  
御茶ノ水

2 | 29 歌川広重 (三代) 道灌山

2 | 31 歌川広重 (三代) 品川海晏寺

2 | 33 歌川広重 (三代) 隅田川

2 | 30 歌川広重 (三代) 八景坂

2 | 32 歌川広重 (三代) 目黒元不二

2 | 34 豊原国周 木馬遊び

2 | 36  
豊原国周  
田植え

2 | 38  
豊原国周  
大工

2 | 40  
豊原国周  
呉服店

2 | 35  
豊原国周  
母子

2 | 37  
豊原国周  
稲刈り

2 | 39  
豊原国周  
左官

2 | 41  
豊原国周  
花売り

2 | 43  
豊原国周  
生花

2 | 45  
豊原国周  
舟遊び

2 | 42  
豊原国周  
手古舞

2 | 44  
豊原国周  
三曲

2 | 46  
豊原国周  
化粧

2 | 48  
豊原国周 駕籠かきと美人

2 | 50  
豊原国周 芸事習い

2 | 47  
豊原国周 駕籠かき

2 | 49  
豊原国周 水垢離